



「フィッツロイ山群」

## 南米最南端パタゴニアを訪ねて

期 間 2013年1月29日～2月12日

参 加 石川 誠・佳子 他11名

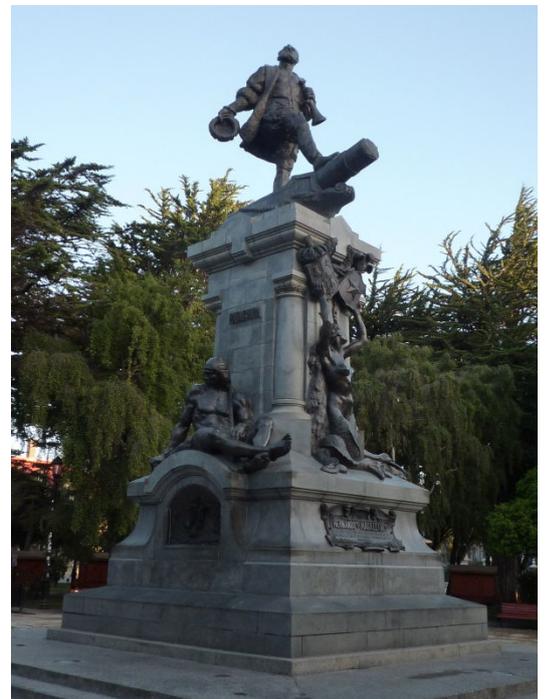
1/29日成田 15:30-翌日 14:00 アトランタ 21:50-9:25 サンチャゴ 14:00-プエルトモン経由プンタアレーナス 18:15

成田発デルタ航空 296 便でアトランタ、チリのサンチャゴ、プエルトモンを経由し最南端の町プンタアレーナスに到着したのが1/30日夕方、まさにトランジットでしばし待ち時間を加えても長い時間機内に缶詰、日本の反対側に到着する。



「荒れるパイネ山群」

南にある最果ての町プンタアレーナスに着いたのが夕方6時過ぎ、早速中心街のホテル「カボ・デ・オルノス」に宿泊する。日本とチリの時差は丁度12時間、日本の午後6時がチリの朝6時となる。何故か不



「マゼランの銅像」

サンチャゴでは日本とは真逆で暑く、半袖シャツを着たいくらいである。飛行機待ちのため、サンチャゴの半日観光に出

て、庶民の台所メカルド市場、サントルシアの丘、大聖堂など見学する。

サンチャゴ～途中プエルトモンを経由しチリで一番

思議な感じがする。

今回のガイドはアフリカ・キリマンジャロ登山でも世話になった仙台出身のアルピニスト志小田清光さんである。

プンタアレナスは、マゼラン海峡に接した港町ここから南極に行く船が出航している。

町の中心にある公園にはマゼラン像が立っている。この像の足元には先住民であったアラカルフ族とテウエルチェ族がまさに征服者と被征服者の立場をこの像は表現しており、腰かけているアラカルフ族の足に触れると無事に航海を終えることが出来、幸せになるといふ言い伝えからその足は光っていた。ちなみに私もこの足先を撫でてきた。



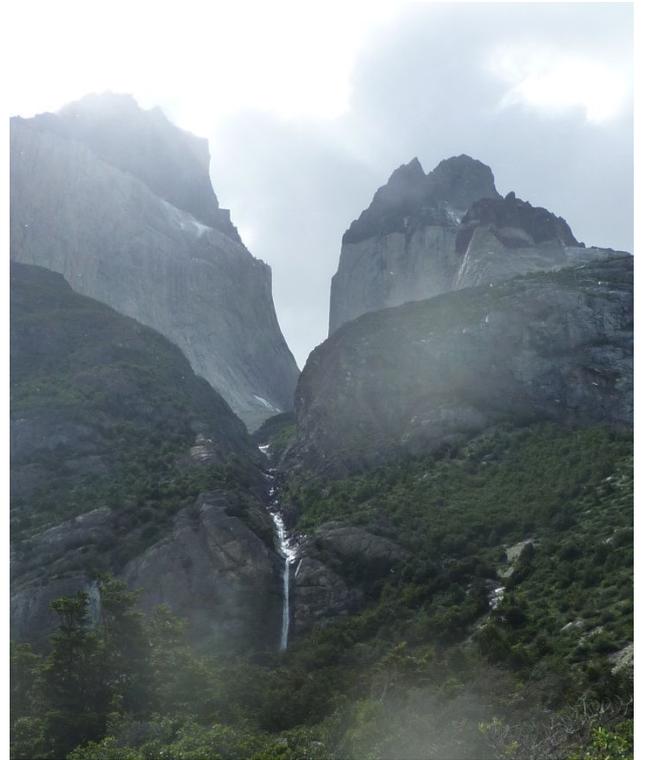
「ノルデンショルドの畔を行く」

**1月31日 8:00 発-専用車6時間-ペオエ湖を船で横断  
パイネ・グランデ小屋着 15:00**

早朝最果ての港町プンタアレナスを出発、バスでプエルトナターレスを経てパイネ国立公園に向かう。

此処は町を一步出た途端荒涼としたパンパ(荒原)が広がりところどころ大きな岩が転がっているのは、昔氷河が運んできたものだという。所々に羊たちや牛たちが草を食みガウチョが颯爽と馬にまたがり追っていた。

途中では小さな町で土産物屋を兼ねた茶屋でトイレ休憩を兼ねコーヒーを飲む。ここのエスプレッソは(4ドル)大変美味しかった。バスは常に横風を受けながら荒涼とした大平原の中を時速100kmで疾走して行く。6時間ほどでパイネ山群の入り口ペオエ湖に到着する。



「パイネの角・クエルノ・デル・パイネ」

天気は高曇りで時折寒い風が吹き寄せる。ここから船でペオエ湖を渡りネパイネトレックのスタート地点である山小屋「リフヒオ・パイネ・グランデ」に向かう、湖を渡る頃より氷雨が降り、寒風が吹き始める山々は時雨れて稜線は見る事が出来ない。2、3日前のパーティーは湖が荒れて船が岬を回った地点で引き返したとの事であった。そのくらい天気は安定しないようである。山小屋は大変立派で良く整備されていて簡単なシャワー施設もあった。

周りはキャンプ場となっていて、各国から来たトレッカーが雨の中テントを張っていて寒々としていた。



「パイネ山群」

1部屋4人部屋で男女別、2段ベッドで梯子はあるが上段には手すりが無く、寝返りをすると落ちそうな感じであった。

食堂は広いが宿泊客も多いので日本の山小屋と同じく時間制で順番待ちとなる。肉料理をメインとしてパン食、サラダ、スープの取り合わせ、まずはビールで乾杯、後は赤ワインを飲む。

## 2月1日 小屋 8:40 発-クエルノ小屋 16:10 着

今日からパイネトレック 3日間のスタート。本来なら「パイネの角」クエルノ・デル・パイネを正面にイタリアーノキャンプに向かう。ここからフランセス谷に入り、氷雪の峰パイネグランデとフランセス氷河をまじかに仰ぐ展望地に向かうが、あいにく天気が悪く氷河は見えないが、頂上は寒い烈風と雲の中に身を隠し、微笑んではくれなかった。元来た道に戻りクエルノ小屋へのトレールを歩く。

右にはノルデンシヨルド湖を見て、左側にはクエルノ・デル・パイネを展望しながら歩きやすいトレールを辿る。



「黄色が鮮やかなレデースリッパ」

隠れていたパイネ山群も時間が経つにつれ、その雄大な姿を徐々に現し感嘆の声を上げ休憩地点では写真を撮るのに夢中である。

現地ガイドの説明によるとパイネの岸壁群にはコンドルの巣があり、時折見ることが出来るとのことであった。

しばらくして空を見上げるとコンドルが飛んでいて、上昇



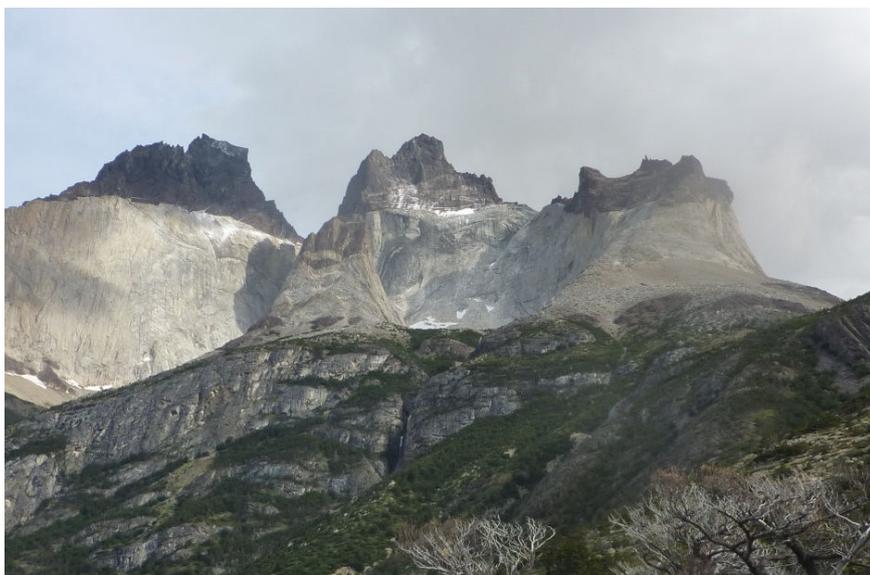
### 「クエルノ小屋からのパイネ、」

気流に乗って3、4羽が大きな翼を広げ優雅に飛んでいた。

羽を広げるとその長さは優に3m位になり、体重も10kgになるという。猛禽類の中では最大の鳥ある。

エサは何かと聞けば、ここには兎、キツネ、野ネズミそしてピューマなどが生息しているという。まさに南米の歌で我々になじみの深い「コンドルは飛んでゆく」を目の当たりにしたのである。

道端には花も咲いていてファイアーブッシュという赤い花、黄色い花など咲き乱れていた。



「海から隆起したパイネの雄姿・地層の違いが判る」



「時雨れるパイネ」

中でも興味を引いたのは紫黒い実を付けた野生のブルーベリーが咲いている。現地名は「カラファテ」という。

時折野生のブルーベリーを摘みながら歩を進める。この頃より高曇りの空も上がり青空が広がりパイネの岸壁群も見えてきた。6時間くらいの行程で今日宿泊する山小屋クエルノ小屋に到着する。

此処にはロッジが8棟あり、その他に食堂、宿泊棟が建っている。屋外には天然風呂が沸いていて薪で沸かしていた。

ロッジは1棟に2人様でベッドがあり、前には湖、夜には天窓から眺める星空と聳えるパイネが圧巻であった。

夕食は食堂でディスコ調の音楽がCDから流れいやか応でもラテンの雰囲気が出ている

食事はいつも通りのメニューで配膳を前にここの若いコック2人はエブリバディーと呼びかけながら、ディスコ調の音楽のボリュームを上げ、両手で調子を上げながら踊りだし、食卓に座っている各国からの宿泊にも一緒に音楽に合わせて、手を上げ手拍子で雰囲気を盛り上げていて。さすがラテン系の陽気な雰囲気に皆もノリノリで楽しい食事に誘うのであった。

そんな楽しい中の食事は疲れも吹っ飛び美味しく食べることが出来た。日本でもこんなに楽しい食事風景には出会ったことが無いのだが。一興である。



分

### 「陽気で屈強なポーター達」

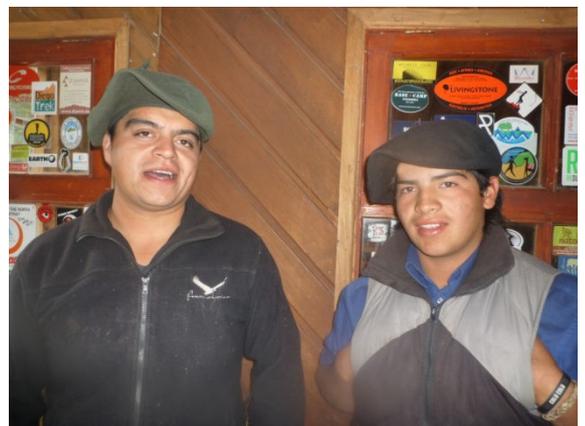
岐を分けてアセンシオ谷に入ってゆく。周りの山々は造山活動の名残が有る褶曲運動の縞模様がくっきりと現れている山壁が残っていて、日本ではあまり見ることが出来ない風景である。

その隙間から流れ落ちる瀧は何百米あるのだろうか、強い風で落ちる水も途中で霧状になって舞い上がっていた。



「荷揚げを終えて」

この谷を遡る時には時折吹く突風に参加者の一人は被っていた帽子を吹き飛ばされてしまった。分岐から1時間程歩いて谷間の中にあるチレノ小屋に着いた。此処には途中荷揚げの為に追



「二人の若きガウチョ（牧童）」

### 2月2日小屋 8:30 発ーチレノ小屋 16:00 着

クエルノ小屋を8時30分スタート ノルデンキョルド湖を右に見てアップダウンの道をチレノ小屋に向かう。

途中の道端にはマルガリータ（マーガレット）やカラファテ、レディーススリッパ(黄色い花)などの花が咲き、空には キツツキ、チュルチュル(ウグイスの様な鳥)、コンドルが舞っている。天気も良く大自然の素晴らしい中を歩を進める。途中明日泊まるラス・トーレス小屋への

越して行った馬がくつろいでいて、その世話をガウチョ（牧童）が世話をしている。このガウチョもチリ・アルゼンチンに居る牧童達でバスクベレーを被り、長靴を履き颯爽として、プライドを持った田その様はまさにダンディーで格好良いのである。

## 2月3日 チレノ小屋 8:30 発-ラス・トーレス小屋 15:30 着

朝小屋を出てトーレス・デル・パイネを見にアセンシオ谷を遡る。谷の中は多少雨模様1時間ほど歩いて麓の管理小屋に入る。此处からパイネ展望地に上がってゆくのだがモレーンも高く、展望地までは風が強くて危険なため、展望台に上がることが許可されず、登山禁止となってしまった。残念だが霞むトーレス・デル・パイネしか眺めることが出来なかった。此处からいったんチレノ小屋に戻り今夜の宿泊地ラストーレス小屋に下る。振り返ってもパイネは雪雲の中で小屋への道のりの中で一度も頂上は見ることが出来なかった。

昨日泊まったクエルノ小屋への道を分けて一路ラス・トーレス小屋への道をたどる。後ろには前衛峰である雪を被ってコ・チョコ・パイネを見ることが出来た。ここで現地ガイド・フアークンド君とお別れ「日本語を覚えて早く良い嫁さんを貰えよ」と伝える。まじめで実直、よくサポートしてくれた。

## 2月4日 ラス・トーレス小屋 8:30 発-専用車で国境を越えカラファテ 15:00 着

ラス・トーレス小屋での朝焼けは素晴らしかった。フィッロイの山群が朝日に輝いて感動的。ここからは迎えの専用車でチリからアルゼンチンへ入る。途中入国管理事務所で入国手続きを済ませ、迎えのバスに乗り換える。バンパの中を疾走し、アルヘンティーノ湖の保養地カラフファテに入る。ここはちょっとした観光地でレストラン、ホテル、土産物屋、カジノなどがあった。



「崩れ落ちるモレノ氷河」



## 2月5日カラファテ 9:00 発-10:00 ペリト・モレノ氷河見学しカラファテに 14:00 着-カラフアテ 15:00 発チャルテン 20:00 着

カラファテから車で2時間程、世界遺産であるロス・グラシアレス国立公園にあるペリト・モレノ氷河見物をする。氷河湖ボートクルースに乗り迫力ある氷河見物。幅4km高さ平均50m一番高い処で70m氷河の

奥行きは23.4kmと長く壮大である。地球温暖化で各地の氷河が衰退しているという声を聴くが、此処の氷河はアンデス山脈に降った雪が氷となって常に活動し後退していることはないという。目の前でアイスビルディングが崩壊する様は凄く、あまりに大きく音がする方に目をやるとスローモーションビデオを見るがごとくゆっくりと落ちて行くのである。



「フィッツロイ(3,405m)の雄姿」

氷河のかなり手前までボートで寄るので見上げるその凄さはまさに迫力がある。

ボートから上がり展望台でランチ、やはり氷河の影響か雲がかかり小雨模様で寒々としていた。

氷河見物の後、夕刻フィッツロイのベースとなる村チャルテンに入る。

街はずれからフィッツロイの山影を見ることが出来る。

2月6日 チャルテン9:00発ーフィッツロイBC14:30着



「ロス・トーレス湖からのフィッツロイ峰」

麓のチャルテンから4時間ほどで着き家族連れのキャンパーも多く、日帰りのハイカーも多いのではないかな。

ここアルゼンチンでは、国立公園内に山小屋やロッジの建設は禁止されていて、すべてテントで宿泊することとなる。食事はスープとスパゲッティのようなもので毎日の肉食よりかなりおいしく食べることが出来た。

チャルテンのロッジを出発して30分ほど歩くとトレッキングルートへの入り口に到着する。歓迎ゲートがある。トレールはゆっくりとした上り坂フィッツロイのBCへといざなう。初めは南極ブナの大木の中を進み峠からフィッツロイの堂々とした雄姿を望むカプリ湖を経てBCへ。天気も良く暑いくらいである。

カプリ湖のほとりには地元から上がってきた家族連れや各国からのトレッカーが思い思いに休憩している。

キャンプ地はリオ・ブランコ川のほとり林の中に設営されていた。



「カプリ湖から見上げるフィッツロイ峰」



「フィッツロイ 3405m」

2月7日 BC 8:15 発-11:00 ロス・トーレス湖-11:30 発-BCに戻り 13:00 発-セロトーレ BC 16:40 着

美しい朝焼けの中にフィッツロイ山群が俊立している。大変美しい。午前中はセロ。ポワンスノなどフィッツロイ山群をまじかに見る氷河湖のロス・トーレス湖まで往復する。湖は、BCから川を渡渉しモレーンを1時間程上る。

モレーンの淵を下ったところに突然素晴らしい岩峰が現れた。しばし呆然と見上げその岩峰のでかさ、高度感に圧倒された。永年話や本で見聞きしたその憧れのフィッツロイが現れたのである。思わず

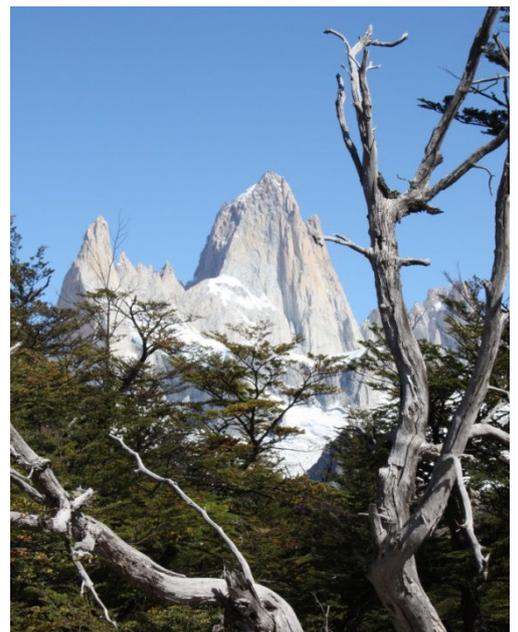
登攀ルートを目で追いながらしばし感動に浸る。いつまでも見ていたい思いを断ち切り、後ろ髪を引かれながらもキャンプ地へと戻った。

ランチを食べ、比較的平坦な道をラ・マドレ、ラ・ヒージャの二つの湖のほつりをセロトーレのBCへ向かう。



「フィッツロイBCは林の中」

途中の峠からセロ・トーレの銑峰を見ることが出来た。これもまた素晴らしい岩峰の峰々であり、海底が隆起してこの様な自然の中にできた岩峰に造山運動のエネルギーの凄さを感じる。



「木間越に見るフィッツロイ」

2月8日 BC6:00 発展展望台往復し、BC8:30 発-12:10 チャルテン着  
チャルテン 14:30 発-カラファテ 17:00 着

朝 キャンプ地から氷河湖のトーレ湖に向かう  
登り1時間程の行程で標高700mほど、湖はモレ  
ーンを登りきったところに静かに存在した。しかし  
湖面から見えるはずのセロトーレは雪雲の中に隠  
れて見えなかった。その雲も流れが速く、もし岩壁  
に取りついていたら苦勞する登攀が予想される。フ  
イツロイにしる、セロトーレにしる登攀成功のチ  
ャンスは1にも2にもこのパタゴニア特有の天気  
に左右され、まさに1日のうちに四季があり、たち  
まちのうちに嵐に巻き込まれるという。

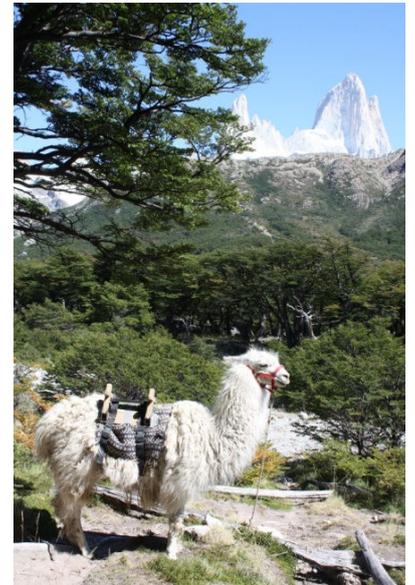


「カプリ湖沿いから見るフィッツロイ」

ここからのセロトーレの岩峰群は見る事が出来ずBCへ戻る。キャンプ地にはリヤマが3頭ばかり  
り迎えに来ていた。ここに張った天幕や装備を麓に降ろすためだ。



「セロトーレ(3102m)の鋭峰」



「荷運びのリヤマ」



「ワルテル・ボナッティの写真」

キャンプ地を後にしてフィッツロイ川の流れを下に見ながらチャ  
ルテンの町に下る。セロトーレの方向を振り返りながら下るがそれ  
は常に雲の中にあつた、慰めに空には大きな美しい虹が懸っていた。

チャルテンの町は風が吹き荒涼とした砂ぼこりの中にあつて、生  
活するにも大変だなと感じさせる。

昼ごろ町に着き迎えのバ  
スを待つ。待機していたトレ  
ック会社の事務所は昼から2  
時間程昼休みで閉めるという。

我々は思い思いに近くのレ  
ストランやアイスクリーム、  
トレッキング用品を販売する  
店を冷やかしながら散策する。



「リオネル・トレイ初登攀の写真」

迎えのバスで一路カラファテの町に戻る。来た時に泊まったホテル「エル・キホーテ」で旅装を解き長いトレッキングの旅を終える。夕飯は丘の上に佇む展望レストラン「アルゼンチン特有の料理ラムやビーフ、生ビールワインに舌鼓を打つ。



## 2月9日 カラファテ発 14:30—国内線（アルゼンチン航空）でブエノスアイレス 17:30

午前中はカラファテの町中を散策しウインドショッピング、14:30発のアルゼンチン航空で南米のパリと謳われたブエノスアイレスに機上の人となる。窓からは荒涼としたパンパの中に曲がりくねった川や遠くにはパタゴニアアンデス山脈の峰々、セロトーレの特異な鋭峰をはっきりと見て取ることが出来た。

夕方ブエノスアイレスに着く。着陸状態に入った機上からは真っ青に透き通った青空の下にゴルフ場や、透き通ったプールが家々にあり、豊かな生活空間を思わせ、さすが常夏のパリを思わせる風景が展開していた。

ホテル「サボイホテル」は、かなり高級なホテルで多くの著名人が訪れている様だ。ダイナーは、ホテルの中でゴージャスなコース、普通なら服装も整え席に着かなければならないような雰囲気、どうも場違いの感じがする。

## 2月10日ブエノスアイレス 21:20 発アトランタへ

午前中ブエノスアイレスの市内観光に出る。世界一幅の広い7月9日通り、大統領夫人エビータが眠る公営墓地、大聖堂、パイプオルガン、キリストが罪に落とされ処刑されるまでの壁画14枚、懺悔の部屋など大きな教会で、ちなみに今年コンクラーベという特別な選挙により選ばれた266代目のローマ法王フランシスコ法王もアルゼンチン出身でローマカトリック協会2千年の歴史の中で初めての南米出身、世界で11億人の信者を率いるトップでもある。初めてアルゼンチンを訪問したことで信者でもないが何か運命めいたことを強く感じた。



## 「カミニートの街中」

オペラハウスのスカラ座、移民たちが住みタンゴ発祥の地サン・テルモ地区、カラフルな家が立ち並ぶボカ地区のカミニート（小さな道）など国際的に知られた場所でもあり、各国から多くの人たちが来ていた。興味を引いたのは街中でタンゴの衣装を着た

男女がそれぞれ観光客を相手に写真を撮っていた。街には陽気なタンゴの曲が流れ一段とラテン系の色を濃くしていたのが興味深かった。

夜空港を9時頃出発の予定であったが、昼間透き通るような空も夜になると黒い雲が湧き、雷までなあって、出発が2時間程遅れ出発となった。

2月11日～12日 7:40着アトランタ-12:05発-デルタ航空295便にて成田16:20着

アトランタには朝の7:40分到着、空港内で6時間程乗り継ぎのために待機する。昼過ぎにアトランタを出発、翌日の12日午後5時頃無事成田に到着し、パタゴニア・トレックの旅を終えた。



「セロトーレの峻峰」



1)



コンドル



ブエノスアイレスの街角



文化遺産 歴史ある「ラ・レオナホテル」



地平線まで広がるバンパとアルゼンチン国旗